「多元的古代」研究会・関東

多元 第19号
Jun.1997

TAGEN

発行人◎高田かつ子 ☎048-881-9111〒336 浦和市南浦和3-19-2-303 編集人◎安藤哲朗
事務局◎下山昌孝方 ☎044-522-4185〒211 川崎市幸区小倉1-1 Ⅰ-514

一元史の旅 ＊特集＊

古田武彦氏《旅の夜話》

東鯷人はどこに？

漢書地理志に、燕地に「楽浪海中に倭人あり、分れて百余国と為す、歳時を以て来り献見すと云ふ」という有名な言葉があり、私はそれが同じ地理志・呉地の「会稽海外に東鯷人あり、分れて二十余国と為す、歳時を以て来り献見すと云ふ」という、ほとんど一対の言葉で記述された記事を指摘し、「これらはセットとして考えなければならない」と主張して来ました。また「それは文字の意味ハシッコ（字書ではナマズ）から言って、恐らく倭人の東、近畿などの銅鐸圏であろう」と書いたことは、皆さんよくご存じでしょう。

学界からの反応は例によって「無期黙殺」でしたが、読者の皆さんから、東鯷人の所在について異議がありました。

その一は青森県の竹田侑子さんで、「東鯷人は津軽の人々に違いない、なぜなら近畿近辺ではまだまだ東があって端とは言えないから」という意味のことを論じられました。私もそのときは、なるほどと感心しました。また東京古田会の吉田堯躬さんも、やはり東の端という事から、本州で東端が海である千葉県ではないかという意見を『《三国志》と九州王朝』（新泉社刊）で出されました。

然しこれらはいずれも決め手を欠いた意見でした。

所が南九州から素晴らしい玉（ぎょく）製品が一つ現れました。玉璧と呼ばれ、日本列島の他の部分からはまったく隔絶した出土品です。いうまでもなく玉は古代中国の貴族のシンボル品です。

そればかりではありません。火山灰帯の下から、恐るべき大規模な都市遺跡が現れたのです。私はかつて長野県阿久遺跡や青森県三内丸山遺跡を「縄文都市」と名付けたことがありました。一元史観の学者たちは最初にそれを嘲笑し、実体が分かるにつれて、私の名付けたことを無視して、自分の呼び名のように使い始めました。

しかし今度出てきたのは、「縄文一大都市圏」とでも呼ぶべきものでした。三内丸山より早い時代の縄文都市が東になって出てきたのです。しかもはるかに古い年代です。

わたしは考えます。これこそが東鯷人の国であると。この位置は東シナ海の東端に当たります。陸の考え方では理解できなかった「東の端の国」が、視点を海上に据えればすらすらと解けるのです。

鬼界カルデラと記紀

鹿児島で新東晃一さんにお目にかかりました。町田洋さん（都立大名誉教授）の示唆を受けて、鬼界カルデラ以前の出土物（縄文草創期・早期）を発掘されている方です。以前から知られていた現象、鹿児島湾岸を中心に、西南日本が今から六千三～四百年前、鬼界が島の大爆発によって、厚く火山灰に覆われています。鬼界が島は今の喜界が島ではなく、硫黄島がその名残りだといわれています。

その爆発によって、まず鹿児島湾南辺は即時壊滅しました。薩摩・大

隅・屋久島・種ヶ島はたいへんな厚さの火山灰（アカホヤ）で覆われました。アカホヤは考古学のメルクマールになっていまして、この下から出土すれば六千三百年以前ということになるのです。そしてその下から続々と古い遺物が出てきたのです。特に著しいのは栫（かこい）ノ原遺跡や上野原遺跡などは、縄文草創期・早期などの遺物がぞろぞろと出て来る。他の地域でも出ないことはないのですが、量質ともに段違いです。それこそ縄文のポンペイとでもいうべき姿です。

なお図のように、鹿児島県・宮崎県全域、熊本県と大分県の南半分、高知県足摺岬周辺に三十㌢の降灰があり、その外側、長崎県・大分県・四国のほぼ全域、本州の瀬戸内海沿岸、奈良県・和歌山県・大阪府・淡路島・紀伊半島全域に二〇㌢の降灰があったのです。しかし福岡県・佐賀県・長崎県から山陰地方には、二〇㌢未満の降灰しかなかったのです。

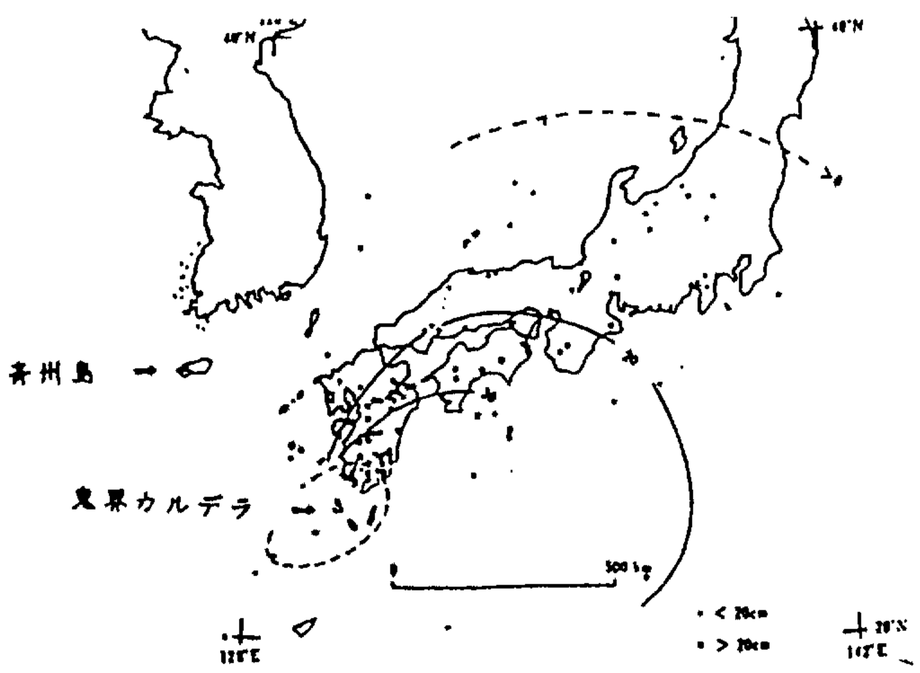
新東さんはアカホヤを境にして、前後の文明が断絶して全然変わったものになってしまった、という意見です。しかし私には必ずしもそうは考えられない。そこで町田さんに電話で聞いてみました。

「降灰が二〇㌢以下の厚さだったら人は耐えられたでしょうか。私は程度の違いで生き残った人がいたように思うのですが」

「二〇㌢以下だったら何とか耐えて生き延びた人が、当然いたと思いますよ。」

「それ以上でも逃げることはできたでしょうか？例えば舟で」

「舟なら大丈夫でしょう」



アカホヤ火山灰の降灰分布

結論から言いますと、アカホヤ以前の縄文草創期・早期の土器は北に伝播している。島根県・鳥取県西半、岡山県西半などまで及んでいます。

町田さんのいう何とか助かった人たちのいたところ、それは福岡県・佐賀県・長崎県と熊本県の一部、そして山口県・島根県・鳥取県など、つまり筑紫と出雲中心の領域です。なんとそれは、古事記・日本書紀の活躍舞台です。なぜ古事記・日本書紀に、筑紫・出雲が頻繁に現れて、南九州や岡山や広島が出てこないのか？　最初に読んだときはだれでも変だと思うんです。しかしすぐ馴れて不思議とも思わなくなっていくんですね。このことの背後に、鬼界カルデラの濃密な影響から地域が再生して、新しい文明を築いたということがあったのはないでしょうか。そしてそれは、隠岐の島と腰岳の黒曜石を中心とした文明で、その影響は次の弥生時代の文明分布とも密接な関係がある、ということです。記紀の時代は弥生ですが、ここでも縄文期を背景に、鬼界カルデラの影響を受けているのです。

河姆渡に渡った人たち

舟で逃げた人たちのことを考えて見ましょう。

現地の平田信芳さん（地名研究者）によると、鹿児島県指宿の漁師の人がこんな事を言っているのを聞いたことがあるそうです。「カツオを積んだ舟で、三、四日寝ていたら江南に着く」と。いつも必ずそうとは思いませんが、風と潮流に恵まれればそういう経験をした人がいるくらい、容易に渡ることができる地域のようです。

渡った先は江南の、河姆渡文化の盛んな地域、そこに渡った南九州の難民が、この文明の興隆の一因となったとしても不思議ではありません。「様式が違う」と考古学者は言うでしょうが、命からがら逃れていった難民が、自分の文明の様式を押し通すことができたとは考えられません。むしろ奴隷または下級労働者で、ひたすら現地の文明様式に従った、と考えるのが実際に近かったのではないでしょうか。そして、今から六千年前後前に、この地域に文明がまさに一大発展するのです。偶然の一致でしょうか。

呉越千字文

岩波文庫から最近『千字文』（小川環樹・木田章義注解）が出版されました。小川さんが詳しい解説を書いておられます。それを読んでいて気が付いたのですが、現存の『千字文』は、西安・洛陽、楽浪・帯方・筑紫・大和という経路を取った、いわば『北千字文』であり、更に細かくいうと『千字文』は東晋時代にできた書物です。東晋はまたの名「江左」と言われるように、西晋が滅亡して江南領域に移った政権ですが、

為政者は北の西安や洛陽から来た人たちですから、文字も黄河流域から持ち込んだものです。

私が鹿児島に行った時、実に読みにくい、不思議な字を使った地名がぞろぞろありました。例えば指宿の近くに穎娃（えい）という駅があります。この辺は我々の漢字の守備範囲にはない字ですね。私は「直観的仮説」でこれらは江南から直に来たのではないかと思うのです。いわば『呉越千字文』とでもいうべきものがあったのではないか、と思います。その理由は先程言いました中国の江南に我々が知っている漢字とは一風変わった文字を持つ高度の文明があったこと、南九州にも北九州とは異質の先進文明があったこと、江南の河姆渡文化圏と直接往来の交流があったと思われることなどからです。（この河姆渡の「姆」という字もたいへん変わっていますね。何で母に女偏が付くのでしょう）

百済の年号

宮崎県南郷村に、絹地に書いた文書が伝わっていて、百済の年号が書かれています。宮崎大学教授だった副宿孝夫さんが、詳しく研究しておられます。従来の歴史家には驚天動地の出来事と見えるでしょうが、考えてみれば、当たり前のことでもあるのです。

『三国史記』・『三国遺事』という朝鮮半島の歴史を書いた最も古い本がありますが、これは統一新羅の立場に立って書かれたもので、高麗や百済については、特に大義名分についての欠落があり、年号を使ったという記事はありません。新羅で使っていて唐の皇帝に咎められ、慌てて止めたという記事があるだけです。しかし好太王碑には「永楽」という年号が刻まれていますし、また新羅の王が出たという母域の百済に、年号が無かったとは考えられません。それが今度こんな形で出現したのです。

それでは倭国は？　「日出づる処の天子」を名乗った倭国で年号が無かったでしょうか？　そんな事はあり得ません。新羅も百済も高句麗も「王」を名乗っているだけなのに、年号を持っていたのです。天子を名乗るとき、最も不可欠なのは年号です。「正朔を建つる」ことがどれほど必要だったかは、現在の我々の想像を越えるものがあります。

七、八世紀の東アジアの情勢を見て、もっとも妥当なのは「九州年号」が存在すること、これが無い状態を想定することの方がむしろ困難なのです。

（まとめ・安藤哲朗）

『出雲の旅』報告

事務局　下山　昌孝

四月五日から七日にかけて、出雲の遺跡や神社を訪ねました。久し振りに古田武彦氏が講師として同行し、バスの中やホテルの講義室で「加茂岩倉遺跡と神庭荒神谷遺跡から出土した青銅器類の時代的な差はどうか、又これらを土中に埋納した経緯については、和田家文書に詳しく記載されている」等について、熱っぽく解説してくれました。以下は三日間に亘る旅の報告です。

（第1日）松江駅で三二名、出雲空港で二〇名が乗車して、補助席までほぼ満席の状況で、出雲遺跡巡りの旅に出発した。第一日の遺跡案内は、斐川町文化財保護審議会委員の池田俊雄氏にお願いし、まず昨年39個という大量の銅鐸を出土して、「青銅器の出雲」をアッピールした加茂岩倉遺跡を訪ねる。あいにくの雨の中を、国道からはずれて小さい谷あいを登って行くと遺跡に着く。対岸の展望台に上ると遺跡の全景が見渡せ、大黒山に続く尾根筋の急な斜面に、「こんな場所に」と思うような所に三九個もの銅鐸が埋納されていたとの事で皆驚く。風土記大原郡神原郷の条に「天の下造らしし大神の御財を積み置き給いし處なり」と記されており、大国主命が神宝を埋めた所と考えられている。

次に神庭荒神谷遺跡に行く。加茂岩倉遺跡とは、大黒山（大国主命に由来する名か）を挟んでわずか三、四kmの所にある。こちらは開けた谷からわずかに入った山の斜面にある。一三年前に、銅剣三五八本、銅矛一六本、銅鐸六個を出土して全国的に注目された遺跡であり、現在は史跡公園として整備され、現場には発掘状況を示すレプリカが並んで展示されている。ここで古田氏から、銅剣と銅矛の区分について解説があり、現在銅剣とされている物についても、銅矛と考えるべきであろうとの事であった。

昼食後、出雲市の下古志町正蓮寺周辺遺跡に行く。神庭荒神谷と加茂岩倉遺跡からは、大量の銅器類が出土しているが、周辺には弥生の居住遺跡は見つかっていない。ところが斐伊川を挟んだ対岸の出雲市に、直径約四百mと推定される大環濠集落が昨年発掘された。現地では、出雲市教育委員会の三原一将氏に発掘状況の説明とご案内をして頂いた。まだ一部の区域しか発掘しておらず、

全貌を明らかにする事は出来ないが、弥生時代の環濠数条と共に、竪穴住居跡、井戸、土壙墓等が発掘されており、大規模な集落であった事は確実である。なお出雲市には、やはり斐伊川沿いに四隅突出墳で有名な西谷墳丘墓群や、矢野集落遺跡などがあり、弥生時代の居住区域（都城）であった可能性が大である。その後、出雲大社（古代の杵築大社）にお参りし、宝物館で翡翠製勾玉や北九州型銅戈などを見て、松江市に戻りホテル白鳥に投宿した。

ホテルに到着後、島根県埋蔵文化財調査センター長の宍道正年氏による講演が行われた。神庭荒神谷と加茂岩倉遺跡出土の青銅器類の種類とその出土状況について、沢山のカラー写真を使って説明して頂いた。更に、銅剣と銅鐸の模鋳品（出土品の形状、材質を模して造った物）を真近に見せて頂き、銅鐸の清んだ音を聞かせて頂いた。

夕食後は更に古田氏の最近の研究に関わるご講演があり、実に充実した一日であった。

（第二日）昨日から続いている小雨の中を、宍道湖の北岸（松江市内）にある島根県立埋蔵文化財調査センターに行く。県内の遺跡出土品などをざっと見学した後、近くの古曽志古墳公園に行く。宍道湖を見下ろす眺望絶景の丘陵上に、出雲特有の方墳や大型の前方後方墳が復元されている。何故出雲には四隅突出墳や方墳が多いのかについて、古田氏は高句麗との強い結び付きを感じさせると説明された。

次いで鹿島町の佐太神社に行く。風土記秋鹿郡の条に「神名火山、郡家の東北九里四十歩なり。謂ゆる佐太大神の社は、即ち彼の山下なり」とあり、神名火山は神社の西の朝日山と考えられている。三殿が並立しており、中央の正殿には佐太大神を祀り、南北両殿には天照大神などの外、秘説四座と言う神名を秘した神々を祀っていて興味深い。神社の前に鹿島町立歴史民俗史料館があり近くの佐太講武貝塚の出土品が見られる。縄文前期から後期にわたる大型貝塚遺跡であり、貝層断面の標本と共に縄文土器や石器が展示されている。

昼食後、宍道大橋を渡って松江市の南部に行き、旧意宇郡の中心部を巡る。まず素戔嗚尊と奇稲田姫を主祭神とする八重垣神社を訪ねる。しかしこの有名な神社も風土記には記載がなく、素戔嗚尊の御子・青幡佐久佐比古命を祀る佐久佐社が、それであろうと言われている。

「八雲立つ風土記の丘」に立つ。意宇平野を見下ろす丘陵上にあって、境内には岡田山古墳群があり、前方後方墳と円墳が残っている。風土記の丘資料館には、県内各地の遺跡出土品が多数展示されているのだが、大部分は四月二六日から東京で開催される「古代出雲文化展」の為に、既に搬出されている。残っている数少ない展示品の中で、松江市平所遺跡出土の「見返りの鹿」や馬の埴輪の造型美が素晴らしい。古墳時代が、現代に通じる芸術家たちの活躍した時代であった事を思わせる。

次いで神魂神社を参拝する。今も伝わる出雲国造の代替わりの度毎に、火継神事が行われており、社格は高いのであるが、なぜか風土記にも延喜式にも記されていない。神社の由緒書には、大庭大宮と記されており、国造家が意宇郡にいた時代の御所で在ったのかもしれない。本殿は天正一一年（約四百年前）に建造された最古の大社造建物であり、国宝に指定されている。脇社を見て行くと荒神社（アラガミの社か）がある。荒神谷遺跡の近くにも荒神社があり、この近くには多いのだが、もしかしてこれはアラハバキ神社のことかも知れないと気が付いた。

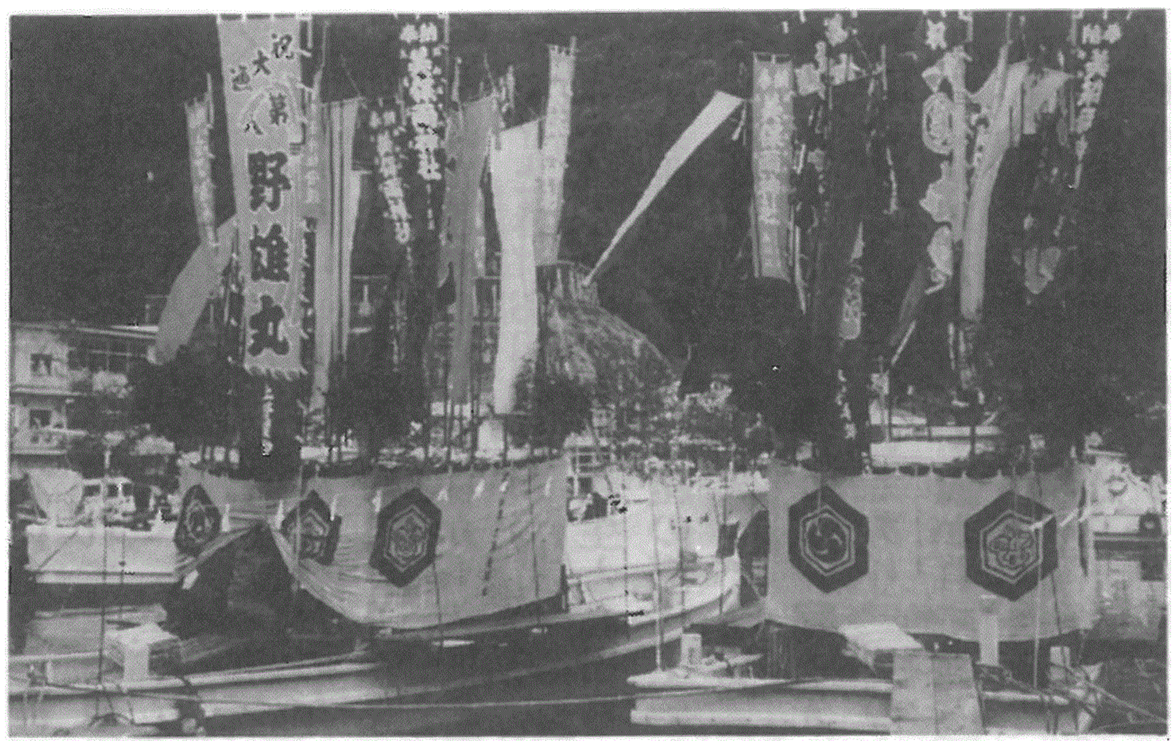
第二日の最後は熊野神社訪問である。風土記には杵築大社と共に大社と記されている。主祭神は素戔嗚尊であるが、元は熊野大神を祭祀していたと思われる。風土記意宇郡出雲神戸の条に「伊弉奈枳の麻奈古に坐す熊野加武呂の命と、五百つ鋤の鋤猶取り取らして天の下造らしし大穴持命と、二所の大神等に依さし奉る。故、神戸といふ」と記されている。毎年十月十五日に、出雲大社で行われる鑽火祭に熊野神社が所蔵する火鑽臼と火鑽杵を借りる神事が続いている。神職の熊野氏がユーモアたっぷりに神社の来歴などを説明してくれた。なおここにも荒神社が残っていた。

ホテルに戻り、夕食後は又古田武彦氏の講演会が二時間半に亘って行われた。土佐清水市で行われた「足摺岬周辺の巨石遺構」報告書発表会に出席された後、南九州を訪れた時の見聞を中心に話をされた。宮崎県南郷村に伝わる古文書から百済年号を発見した事、鹿児島県で最近発掘調査されている縄文草創期の遺跡群について、更に東鰐人に関する新解釈等について話された。

（第三日）ホテルの近くに阿羅波比神社があるという。昨日も荒神社をいくつか見て、アラハバキ神との関係が気になる所である。とにかく行って見ようと、バスを回して貰った。時間が早いせいか誰もいなくて、神

社の由来を聞く事は出来なかったが、脇社を見るとやはり荒神社があり、側の樹には津軽の虫追い祭に見られる「藁で作った蛇」が飾られていた。

安来市に入り仲仙寺古墳群を訪れる。ここには仲仙寺支群と宮山支群が在るが、いずれも弥生時代の墳墓群である。その中に山陰特有の四隅突出型墳丘墓があり、仲仙寺支群に三基と宮山支群に一基が確認されている。宮山支群に登ってみると、安来平野を挟んで中海を見下ろせる丘陵の先端部にあって、非常に眺めの良い所である。ここの宮山四号墳が、三〇×二四mの規模を持つ四隅突出型墳丘墓であり、その特異な形に目を見張らせられた。



次いで安来市内の和鋼博物館を訪問した。ここにはタタラ吹き製鉄の歴史を示す資料が豊富に展示されている。学芸主任の三宅博士氏にお願いして館内を見ながら、タタラ吹き製鉄の歴史とそれによって製造される玉鋼の特徴等について解説して頂いた。

安来市から鳥取県米子市の弓ヶ浜を経由して、再び島根県に入って半島先端部の美保関に至り、美保神社で青柴垣神事を見学した。本殿は比翼造と言われる非常に特徴のある建物だそうだが、現在は補修工事中で残念ながら見る事が出来ない。祭神は事代主命と三穂津姫命とされているが、風土記には御穂須須美命と記されており、記紀以前の伝承では女神一神だったと思われる。

美保神社から松江市に戻り、松江駅と出雲空港で解散し、三日間にわたる大変楽しいそして充実した旅を終わった。毎日朝早くから夜遅くまで、休む暇も無く解説を続けて頂いた古田武彦氏の情熱に引きづられての旅であったが、ここであらためて同氏の若き熱情に謝意を表します。

（一九九七年五月一一日記）

慌て紀行

―青柴垣神事―

立川市　福永晋三・伸子

四月七日、美保神社に到着。すでに岸壁（宮灘）に二隻の御船（みふね）が揺れている。船上には真四角に幔幕が張り巡らされ、その四隅に束になった榊が結び付けてある（速水保孝著「出雲祭事記」には、「四本の支柱に、束にした椎の葉を結びつけて青柴垣に見立て」とある」）幔幕の四辺上部に極彩色の幟（のぼ。り）が何本もはためく。そして船端には笹が数本立てられ、しめ縄が渡されている。やがて青柴垣（あおふしがき）神事の最高潮を迎える舞台となる。

青柴垣神事。先の「出雲祭事記」には「美保神社の祭神コトシロヌシの自殺と葬式を儀式化したもの。しかも、神社側ではなく、氏子たちが頭組織を作って営んできた頭屋祭りである。諸手船（もろたぶね）で国譲りの可否を問われたコトシロヌシは、やむなく父神のオオクニヌシに同意方を進言、高天原の軍門にくだる。しかし、自らは責任をとって死を決意。天の逆手というカシワデを打って、乗船を青柴垣に変え、その中に躍り込んで消えうせる（記紀神話）。これを、中世末に京から流れてきた廷臣太田政清が脚色して儀式化したものという。」とある。古田先生の説かれる、出雲王朝終焉の歴史的事実を反映する神事である。

私どもは、子細を知らぬまま、頭屋祭りということで、そちこちの地元の人をつかまえては問いかけ、右往左往しながら神事を見学したのである。

神事の前にまず腹ごしらえ。青山さんが「美保の町には親子丼がない」と始められ、事代主は色事を好む神様で、あるとき、雄鶏が帰宅のときを告げなかったため、神は慌てて帰るが、途中磯のアワビを踏んでケガまでしてしまう。雄鶏憎しで、卵も鶏肉も食さぬとの由。小泉八雲の「神々の国の首都」にも同様の話が出て来ます。

昼食後、社殿を拝んで、下の青柴垣神事の会所を見学する。

一の当二の当（共に事代主）の男性が、白く化粧して三点の紅をさして上座？に正座まします。それぞれの左側に、白はちまきの前帯しめた小忌人（おんど、女房役）が同様の化粧して座り、そのまた左に赤い着物姿で同じ化粧の、小学生らしい女の子が供人（ともど）として座る。この二組の事代主一家の背後には、

三本足の烏を描いた日像幢（にちぞうとう）や月像幢、青竜・朱雀・白虎・玄武の四神旗や四神鉾などの飾りがずらりと並ぶ。事代主一家は目を閉じたままじっと座っているが、時々幕の裏側に入って行く。家内が好奇心に駆られて、会所の裏側に回って何をするのかと確認に走る。袴つけた役の人に付き添われて、一組の小忌人と供人が町の方へ歩いて行く。一軒の家に入ってしばらくして出て来ただけ。所用を済ませたのか、また役の人に付き添われて会所に戻って来たとのこと。神様から人間に戻る？ときにお目付けがつくのであろうか。この後、古田先生と高田さんが会所に上がり、二組の事代主一家を拝むように向かい合って座り、事代主からか、膳を頂く。一家と先生との間にも膳が置いてあり、その辺りに千円札が何枚も置かれてある。私も会所に上げてもらい、式次第等をビデオに収め、会所から下がった。

御船への乗船、すなわちお葬式の神事にはまだ時間があるとのことで、私どもは町の方へ繰り出した。小雨のぱらつく中、仏谷寺に向かった。途中、祭りの役の一人らしい、右半分が青地に水玉、左半分が茶地に水玉模様の着物を着た小学生に声をかけ、カメラに収める。後でわかったが、編木（ささら）子であった。ひょうきんな男の子で、この後も何度か質問することになる。

再び寺へ向かおうとすると、御船の幔幕が、何かの準備のため、少し開いている。早速カメラに収めたが、幕の内側に葬儀用の黒白の垂れ幕、更にその内側にムシロが巡らされている。三層である。床にもムシロが敷いてある。初期の形態が残されているのか。

寺に着くと、見学する暇もなく、慌てた様子の高田さんが、神事の一行が町を歩いていると聞いて探していると言うので、一緒に探しに出た。家内はそのまま寺を見学したのでこのあとしばらく別行動になった。

さて、高田さんと町中に出て小学校低学年の男の子に出会い、「一行はどこを歩いているの。」と聞くと、場所を教えてくれるのだが、こちらは分からない。結局、彼が先導してくれることになった。「僕は何か役があるの？」「来年、テンガラスだよ。」すぐ近くにいた男の人に「ねえ、僕来年テンガラスだよね。」男性うなずく。「テンガラスって何」「……。」一行に出会う。袴の人二人、ササラ子四人、獅子頭二人、甲冑武者二人の一行である。「七度半でござーる、トーメー。」と掛け声を繰り返しながら石畳の路地を練り歩く。家内も寺を出た後、一行に出会い同じ掛け声を聞いている。この一行は初め「御解除（おけど）でござーる、トーメー。」と掛け声を上げ、文字通り七度半まで町内を巡るそうだ。声を上げるのはササラ子だけ。相当疲れるようで、終わりの方では、武者役の人が「もう少しだ。頑張れ。」と励ましていた。

これは、事代主を探してのことらしく、七度半探しても見つからないので、葬式を出すことになるようだ。事実、この後に一の当・二の当の一行が乗船するのだが、時間は一定していないとのこと。後で会所の前にいた人に聞いたら、「何せ葬式ですから、そうっと人目につかないように出るんですよ。」

ササラ子たちと一緒に会所に戻り、家内と一緒に獅子頭の人や、ササラ子たちや小忌人の世話に当たるという婦人方などにあれこれ尋ねた。

「テンガラスって、この子たちを指すんですか。」

「テンガラスは時を告げる鳥を指すらしく、この一行を言うらしいんです。」

「僕らはササラだよ。ササラ舞をする子もいるよ。」

「ササラ舞ってどんな舞？」

「見てのお楽しみ！」（私どもは残念ながら見る時間はないんだよ。）

白い布を巻いた筒のようなものを背にしていた男性に、

「それは何に使うんですか。」

「小忌人さんが船から降りるとき、これに足を乗せて、それを私が背負って降りるんですよ。」（よく見ると白い紐のついたブランコのような道具である。）

「一人で負われるんですか。」

「そうですよ。結構重いんです。痩せた人が小忌人さんだといいんですがねえ。」「どうして下船の時だけそれに乗せるんですか。」

「さあ。」

白い綿の帽子？を頭に載せたご婦人方に、

「そちらがお持ちの白い大きな布とその金色の飾りは何ですか。」

「これは、小忌人にかぶせるもので す。神事の中でも大切なもので、会所を出るとき、小忌人は必ずこれをかぶらなくてはいけません。」

「どうしてですか。」

「それはわかりません。でも特に大事なものなんです。」

細部の質問になると、皆「わかりません。でも大事なんです。」の返事の連続。由来は分からなくても、大事なものを大事なものとして年々歳々継承して来た人々の力に驚きを禁じ得ない。先の男の子の「僕来年テンガラスだよ。」の明るい響きがよみがえった。何と素直に伝統が継

承されていることか。

ようやく行列が整えられ、乗船の運びとなった。行列は社殿へ向かい、家内が追跡。私は乗船のシーンを撮るべく宮灘へと向かう。社殿へ向かう行列は、簡単に撮影が進んだが、一の当・二の当は両脇に足取り役がいて、その回りをどこから現れたか、屈強の男衆が取り囲んでいて、一種異様な雰囲気を放っている。それでも自分はなんとか撮影したが、隣にいた女性は「恐い～。」と言って逃げちゃったと家内から知らされた。

いよいよ乗船。供人が供人付に負われて乗船し、小忌人が例の布をすっぽりとかぶったまま『天の架け橋』（昼食後の氏子さんの解説に出て来た御船へ渡した板。必ず藤の蔓で結わえられるとのこと。）を渡って乗船。危なっかしい。一の御船、二の御船に先の二組の行列が、かなりバラバラに間をおいて乗船して行く。唐櫃や種種の祭器も運び込まれる。そして最後に、二人の頭屋（事代主）が乗り込む。あの屈強の男衆に囲まれて、御船の間近に陣取った我々を弾き飛ばし兼ねない勢いで御船に向かって来る。この間、あのササラ子が「ねえ、ササラは船に乗っていいのお。ねえ、誰も聞いてくんない」とこぼす一幕もあった。こうして頭屋が幕の内に入って、全員が乗船し終わると、天の架け橋を外し、船端の竹としめ縄を切って落とし、神楽船（どこにいたか知らなかった）が調べを奏でる中、船端の男衆が綱を捌いて二隻の御船を港の中心に引き寄せる。神楽船の調べが続く中、御船はしばらく波にたゆとう。神事のクライマックスである。

残念なことに時間の都合で、我々はバスに戻らねばならなくなった。バスの中から、宮灘へ戻る御船を撮影した。家内は美保にもう一泊される青山さんと、集合にも気づかず話し込んでいて、バスの出発を遅らせたアノうっかり者です。

青柴垣神事は、この後も続くのですが、多元の発表と懇談の会で、青山さんがお話しくださるそうです。その青山さんの見送りを受けて、出雲古代史の旅は余韻を残して終わったのです。空港へ向かう車窓からの宍道湖の夕日が見事でした。

私の出雲旅行

東京都世田谷区　石附　絹子

四月七日午後五時四十分、寝台特急出雲二号は音もなく松江駅を離れた。私にとっては大イベント『出雲の旅』の幕引きである。

旅の充実感の深いほど、心残りの寂しさは濃くなるようである。しかし、嬉しいことに、私の旅は、まだ続いていたのである。同じ車輌に隣り合った同行の四人の方々との駅弁をつつきながらの対談だ。仙台から参加のお二人からはそれぞれ、かの藤村新一氏との旧石器発掘の苦労話、もう一人の方からは豊富な知識の上に立つ歴史観を伺った。今だに古田史学の入口でまごまごしている私には、興味尽きないものだった。車窓の闇に灯がともり、気が付くと、列車は豊岡に停っていた。

その後、向き合う席にご一緒した女子大生の方との会話が、またまた楽しいものだった。小学生の頃より父君から、古田史学のお話を聴いて育たれたとのこと。「でも、必ずしも父と同意見ではなく、家ではよく議論します。」と美しい笑顔で旅の感想をお話しされた。まず、参加されなかった父君より依頼の質問に、先生は、丁寧に熱心に、長時間答えて下さったと、そのお人柄に触れた感動を述べられる。そして、同行の人々の知識が豊富で深いこと、高齢者が多いのに、雨の山道を文句も云わず、加茂岩倉、荒神谷へと登って行ったこと、バスでも、講演会場でも、前方の席からどんどん埋まり、全員が真剣に先生の話に耳を傾けていたこと等に驚かされたそうである。

確かに皆さん、旅程びっしりの毎日を、意欲的な行動力で楽しんでいた。大きな年齢差も忘れて歓談しながらも、古田史学の前途には、こうした若い支持者が増え続けて行くことが、何よりも大切なことではないかと思った。

深夜の京都を過ぎ、眠れぬままに、溢れ落ちんばかりの三日間の見聞が脳裏に浮び上がる。

加茂岩倉、荒神谷の現場と向き合った時、百聞は一見に如かず、とはこのことと、実感する。出土物を中心に狭い範囲を拡大した報道写真では、決して得られぬ感覚がある。谷の奥、雨に煙る山々を眺めつつ、あの銅鐸群は、やはり隠されたものでは、と思った。

出雲大社を始めとする、千木を掲げた神社の数々は、私の期待に十二分に応えるたたずまいを見せていた。中でも、本殿の両側に数々の摂社を祀る神魂神社は、記紀遥か以前の霧のなかに私を誘い、古代出雲神のみならず、縄文の女神たちの気配さえ感じさせてくれた。

最後に見た青柴垣神事は、心騒がせる神秘的なものだった。氏子達により、連綿と守られてきた神事からは、出雲王朝の人々の嘆きの底流が、心に響いてくるようだった。

目覚めると小田原近く、窓には、朝日に染まる富士の頂きがひかっていた。

出雲は私にとり、古代王朝があちこちから顔を覗かせる、ただならぬ魅惑に充ちた土地であった。企画して下さった幹事の皆様に、心より感謝します。

佐太神社など

朝霞市　長井敬二

四月六日、佐太神社・熊野神社に参詣して驚いた。出雲では大国主を祀る出雲大社が、最も社格の高い・いわゆる一の宮であると思っていた。ところがまったく違っていて、佐太神社が二の宮、一の宮はスサノヲノミコト（熊野大神櫛御気野命）を祀る熊野大社であった。ここには亀太夫神事という、極めて珍しい神事があるそうである。また佐太神社には佐太大神・伊弉諾尊・伊弉冉尊・速玉男命、事解男命・天照大神・瓊々杵尊・素盞嗚尊・など、記紀に馴染みの神々が見えるが、その他に「秘説四座」の神というのが、内容は不詳ながら好奇心を刺激する。因みに佐太大神とは猿田彦命だそうだ。

旧暦十月の神集いの由来は、記紀にはまったく現れないが、さすがに現地では伝承に迫力と実感があり、古田先生の考証した、天照大神が最後に対馬からはるばる駆け付ける話も納得させられる。

子供のときから八百万の神々が集う場所は出雲大社だと思い込んでいたが、実は東北東三十キロメートルの佐太神社だそうである。言い伝えによると神々の参集する理由は、伊弉冉尊の死去であるという。そして毎年必ず行われているとのこと。神々が宿泊するところでは、神迎え神事、宿借り神事など一連の祭りが行われる。主祭神・佐太大神（猿田毘古大神）が、神々の招集をつかさどるらしい。記紀（天孫降臨・国譲り・岐神）に出てくる猿田彦とはまた違うイメージの神がそこにはある。そこには一面には農作業が終わった農村の老若が楽しむのに相応しい季節があり、一面では繁瑣な作業に隠された、人々の意識の下にまで隠し込まれた、根強い伝承の力が見えてくるように思われる。

多元史観・古田史学の旅

西宮市　広岡重二（古田史学の会・会員）

四月五日から「古田先生と共に出雲古代の旅」に参加し、七日に美保神社の青柴垣神事を見学した。これは出雲国譲りに関する大国主神の長男、事代主神が無念の水死をとげた事の儀式化された葬祭であった。十四・十五日は博多の灰塚照明氏の案内で志賀海神社の「山誉め祭り」（「君が代」を禰宜二良と別当が斉唱する行事）に参加した。共に、往古より継続している神事との事であった。

陰暦の十月を神無月という。全国の神々が出雲大社に集められ、国々の神様が留守になるから神無月という。出雲だけは全国の神々が来られるので、この月を神在月という。

対馬の「阿麻弖留神社」の祭神に関する伝承は、神無月に出雲大社へ参られるのは一番遅く、帰りは一番早いとの事で、出雲大社に次ぐ高位の神様で天照大神を指すとの事である。

出雲の隠岐島には縄文時代最強力の武器になる黒曜石が大量に産出して、交易や征服の手段となり、莫大な富をもたらし、大国主神が強大な出雲王朝を築いていた。

弥生期の銅器の出土が少い出雲市に近い山中の荒神谷遺跡より三五八本の銅剣（出雲矛）が、また加茂岩倉遺跡から三九個の銅鐸が最近出土して大騒ぎになった。大土木工事の時に掘り出されたのだ。或は、出雲王朝に忠勤を示し、神無月に出雲大社に来る神々が献上したものが出現したものかも知れない。

対馬・壱岐海域で活躍していた天照大神が大陸より強力な金属武器を手に入れ、「葦原中国」の統治権を譲るよう、天鳥船神と建御雷神を大国主神のもとに差し向けた。大国主神は自ら答えず、事代主神にゆだねた結果、事代主神の入水自殺となり、建御名方神の諏訪の国入りで自然放棄の国譲りになった。

天照大神は早速、皇孫ニニギノ命に「豊葦原の瑞穂の国」といわれる板付水田や菜畑水田を含む筑紫の国を制圧させた。これが九州王朝といわれている倭国の起源となった。

板付、菜畑から追放された安日彦、長髄彦等は対馬海流にのり、日本海と砂澤に彼等が作った筑紫と全く同一の縄文末期の水田遺跡として今に残っている。　昔を回想し知己に逢えた楽しい旅であった。

石見国出雲から 柿本人麿を考える（一）

青山　富士夫

私たちは例えば大伴家持とか菅原道真とかの詩に、そのような心情の反映を見ることができる。人麿も、敢えて大和政権の意識の枠の外にはみ出そうとした作品は遺されていないが、その詩人としての本質的な生命は、あの儀礼歌の示す世界とは別な処にあったのである。

人麿と海

生誕伝承地小野は、今海岸から一キロ内外離れている。これでも海に近いと言えるが、古代ではもっと海が近かったかも知れない。石見地方一般は、砂鉄採取のため大量の土砂が海岸に流され、海岸線が海に押し出された場所が多い。人麿が少年時、海に近い里で育ったと考えると、たいへん納得しやすいことがある。

万葉集に遺された人麿の歌は全部で八十七首。（或本に言う、などとして同じ主題が重複しているものは除く）

その中前述の所謂宮庭儀礼歌が二十八首。残る五十九首の中、二十九首が、海または海辺でよまれた歌である（琵琶湖の歌三首はこの方に入れる）。海に関しない歌は残る三十首だけ。当時の宮廷人の生活の軌跡を考え合わせると、これは何らかの個性的傾向を示すものではなかろうか。勿論遺された作品は全作品の何パーセントかに過ぎないことを考慮に入れるとしても、私は人麿と海については、特に深い因縁を感ぜざるを得ない。

もし人麿の出生を、柿本朝臣という称号から穏当に考えて、奈良盆地の中央と考えると、これは極めて特異な性向と言わなければならない。盆地から海まで、どこを通っても一日以上の工程が要る。恐らく成人するまで海と縁のない生活が続いたのではあるまいか。柿本氏は和珥氏の分流であるから、先祖の海人族である和珥氏の血統を引いていて海が好きなのだ、と言う言説もあるが、それでは余りにも間接的に過ぎる。私は詩人の感性にはもっと具体的で理解しやすい由来が考えられるもののように思う。

表現の修辞にも身についた海の体験の匂いが感じられる。人麿は長歌の中で、愛する女性の姿態について「玉藻なす　か寄りかく寄り…（一九四）」、「沖つ藻の靡きし妹は…（二〇七）」、「玉藻なす寄り寝し妹を…（一三一）」、「玉藻なす靡き寝し子を…（一三五）」などと海藻のゆらめくさまにたとえている。外に「川藻のごとく靡かひし…（一九六）」とか「なよ竹のとをよる子らは…（二一七）」などの表現もあるが、海藻の例えが最も多く、熱がこもっている。少年の頃、海中の藻の生態を肌で知っていた印象に基づくものではなかろうか。

荒栲の藤江の浦に鯨釣る海人とか見らむ旅行くわれを　（二五二）

明石の西の海を小舟に乗って旅行く人麿である。そこは鯨釣りの漁舟の多い海だ。人麿は自分が魚釣りの海人のように見えることを、安らかに楽しんでいるようだ。故郷戸田小浜の、夏にはしずかな日本海を思い出しているのかも知れない。

次に人麿の階級意識について見よう。勿論彼は貴族社会に暮す人だ。その割に、地方出身の身分の低い人の運命に強く思いを傾ける。

吉備の津の采女の死りし時に柿本朝臣人麿の贈れる歌の長歌は、……時ならず　過ぎにし子らが　朝霧のごと　夕霧のごと　（二一七）と、印象的な哀調をもって結ばれる。続いてその短歌には、

楽浪の志賀津の子らが罷り道の川瀬の道を見ればさぶしも（二一八・二一九略）

と別な采女の死を悼む歌が二首添えられる。

溺れ死りし出雲娘子を吉野の山に火葬りし時に柿本朝臣人麿の作れる歌二首

山の際ゆ出雲の子らは霧なれや吉野の山の峰にたなびく（四二九・四三〇略）

土形娘子を泊瀬山に火葬りし時に柿本朝臣人麿の作れる歌一首

隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかあらむ　（四二八）

このように、たとえ生前何らかの所縁があったとしても、地方出身の身分の低い女性の運命に、人麿は深い同情を寄せる。

讃岐の狭岑島に石の中に死れる人を視て、柿本朝臣人麿の作れる歌一首併せて短歌（二二〇・二二一・二二二）

妻もあらば採みてたげまし佐美の山野のうはぎ過ぎにけらずや（二二

一）

右は梅原猛氏の淋漓たる解釈もあるが、これもまず名もなき人の身の上と見てよいであろう。

柿本朝臣人麿香久山の屍を見て慟びて作れる歌一首

草枕旅の宿に誰か夫か国忘れたる家待たまくに（四二六）

これは、香久山のほとりの路傍で斃死した藤原宮の役民を哀悼した歌であろうとの解釈が一般的である。藤原宮造営に盛大な賛歌を捧げたとされる人麿は（五〇の解釈）同時にその労役に疲れ倒れた地方の民の運命を嘆く心情も失わなかったのである。

このような、人麿の普通の人、ただの庶民に向けられた暖かいまなざしは、ひとえに天才的詩人の資質の故とだけ考えて済ませられるものではないと私は考える。彼が同情を寄せた采女や役民、それははるかな石見国小野の里で、彼が成長するまで隣近所で共に暮らし、遊んできた隣人そのものの面影ではなかったか。人麿は生まれついての貴族などではなかった。

いや他人のことだけではない。

巻向の山辺とよみて行く水の水沫（みなわ）のごとし世の人われは（一二六九）

これは人麿歌集に出づとされているが、概ね人麿自身の作歌と見られている。併行する歌から親しい人に死別した時の哀傷を歌ったと察せられる。しかし、この歌の背後に漂う孤独感は何としたものだろう。大和の天皇家周辺の名族として、多くの貴顕知友にとり囲まれて暮す青年のそれではない。よるべなき都会の巷に放浪する近代青年のごときそれである。人麿自身にもまた、故郷をはるかにして、一人異郷に漂う身の孤独が身にしみる時間があったのではなかろうか。

本稿は専ら人麿の歌の内面から光を発することにより、その伝記的側面を照射してみようとする試みである。全く伝記の不明な人については、これも一つの方法でであろうと思う。しかし、石見国の果ての出身の人が、遠く大和の宮廷社会で、朝臣という高位の姓を名乗る。その経緯にはいかにも唐突の思いがするのも無理のないところである。そこで最後に、何の史料もないところで実証などはとてもできないが、その可能性はあることを示しておきたい。

「私はやはり石見国出生説は無理であると思う。……当時中央と地方との教養の落差はひどく、人麿のような教養を持った詩人が到底僻地の生まれであるとは思えない」（梅原猛・水辺の歌）これが多くの知識人の共通した先入観であろうが、しかしこれは上淀廃寺出現以前の発想である。同じ山陰の鳥取県淀江町は、益田市郊外よりもっと「僻地」視されていた所である。そこから現存法隆寺より古い面影を思わせる壁画寺院の跡が出現した。八世紀の大和政権の自己礼讃の史書である日本書紀を通じて見えるものだけが歴史ではないのである。益田市は淀江より大陸に近く、便利である。付近には全長百メートルのスクモ塚古墳（未発掘）を含む古墳の密集地帯もある。

伝承地はもと戸田村小野という。古代に小野氏族が住み着いた故の地名であり、祖神小野天大神之多初阿豆委命（たそあずわけ）を祀る神社もあるという（益田市矢富巌夫氏）。小野氏は和珥氏系の一族であり、地元では大和から移住して来たと考えられているが、私は海人族和珥氏の発生は北九州であることから、地理的な関係からも、北九州から直接移住して来たものと考える。小野氏の一派はまた天皇家周辺の名族でもある。人麿は小野氏の縁をたどって大和に来た（或いは北九州経由で）。そして実際には小野氏系の親族である柿本家に身を寄せることとなった……。想像すればそのような経路が考えられる。

朝臣なる姓は氏族ごとに与えられる。しかし、寄生者の人麿にまで、と疑う人もあろう。しかし日本書紀天武十一年十二月項「ただし小故に因りて、己族に非ざらむ者をばたやすく附くること莫れ」との詔が見える。これは八色の姓の制定の前に、氏族制を合理化しようとする政策の中で、要するにとるに足らぬ理屈をつけて、自分の氏人でない人を氏に編入してはいけない、と言っているのである。ということは、逆にそういう風潮が当時は続き横行して目に余る状況になっていたことを暗示する。氏族の単位が重視されるに伴って、誰しも自分の氏を強大ならしめたいのであろう。宮廷詩人として評価を高めようとしていた人麿を、柿本氏が遠い血縁の人として同族に編入する理由は充分にあるのである。そして二年後に柿本朝臣人麿が誕生する。

以上は、実証というには足らず、ただ可能性の筋を辿ったばかりである。今後の思考を進める上の一つの手懸かりにしたい。

一九九六年十一月二十五日

和田家文書の伝承

二月二日「発表と懇談の会」において　古賀達也氏講演　その二

後半は私が研究して参りました和田家文書についてお話したいと思います。

これは昨今真偽論争が……というより学問的な論争を逸脱した偽作キャンペーンというべき、実物も見ないで誹謗中傷をやる、それに対しこちらからは、いちいち実物に基づいて反論をするという具合になっています。

そこで僭越ですが、学問の方法を明らかにしながら……要するにどちらも文献史学の学問の方法論の問題でございますので、それを基本テーマに据えてお話します。

和田家文書のなりたち

「和田家文書」は寛政年間、秋田孝季と和田長三郎によって、津軽に残った伝承とか、全国各地を行脚して安倍・安東に関する伝承を収録して集大成したものです。一番有名なのは『東日流外三郡誌』であります。八幡書店から全六巻四千七百頁で出ています。これは活字本ですが、もとは総て墨と筆で書かれていまして、そのことだけで、個人が簡単に偽作できるような物ではないことが判ると思います。先達て写本のコピーのお手伝いをしました。和田さんから古田先生に写本が次から次へ送られてきまして、それのコピーをとったのですが、それだけで私、右手が腱鞘炎になってしまいました。この重労働を偽作論者に経験して貰いたいと思いましたね。内容も凄いですが、量から見ても、和田さんが仕事の合間に書けるような規模ではないことは明らかです。

寛政年間に集めた資料ということですから、古代に遡る伝承を含んでいますが、基本的には江戸時代の認識で書かれている、という制約に縛られます。この点文献の性質上仕方のないことです。また現在発表されているものは、ほとんど和田末吉・長作父子が書写したもので、明治から昭和まで延々と書写・再写してきたもので、各時代の制約を受けた資料であります。

ではありますが、和田家文書の持つ伝承力はかなり凄いものであるということが分かりました。そういう点をいくつか紹介したいと思います。

安倍宗任の伝承

安倍貞任・宗任兄弟が前九年の役で負けて、貞任は殺され、息子も殺され、弟の宗任は降伏して、一旦は伊予に流され、次に筑紫に流される。和田家文書にも貞任のことは詳しく書いてあり、宗任も一部書いてはいますが、筑紫に流されてからのことが分からないのです。津軽で収集した伝承ですから、九州のことは掴み難くかったのでしょう。

そこで九州における宗任の伝承を調査しました。

1、『筑前國続風土記』（貝原益軒編、一七〇九年成立）の宗像郡大島の項に次の記事が見えます。

「安倍宗任初讃岐國に配流され、後に此の島に流され、終に此の島にて死せり。」「其子三人、長子は松浦にゆく。松浦黨の祖なりと云。次男は薩摩にゆく。三男は大島にとゝまり、島の三郎季任と云。」「宗任が配流せられし時従来りしと云屋形、萬澤、豊福の三氏の遠孫も、今に大島に残れり。」

この記事によれば、宗任は筑前国宗像郡大島で没したことになります。灰塚照明氏によれば、現在でも宗像郡には安倍姓が多いといいます。

2、一方、『筑紫軍記』などによれば、宗任は肥前松浦郡の渡辺氏源久の娘を妻とし、後の松浦氏の祖ともされると書かれています。

3、一方、大正十三年に著された山田宇吉著『安倍宗任と緒方惟栄』に紹介された豊後の宗任伝承があり、

「治暦二年（一〇六六）に宗任・則任兄弟とその母（新羅の前）一行が伊予を経て豊後に着き、地元の長者四穏田大太夫の娘、花本を妻とし長子大彌太惟基をもうけた。この大彌太の子孫に九州の雄、緒方惟栄が出る。宗任は後に肥前松浦の渡辺氏（源次久）の娘、真百合を妻にし、真百合との間に三人の子ができる。長男は松浦伊賀介宗直。後に安倍姓に復し、大友氏の臣となる。

次男は松浦の分家となり、平戸に住し下松浦と称した。後の肥前の守松浦鎮信の祖先である。三男は三郎實任。」

「宗任は永久二年（一一一四）三月十五日、八十三歳で当地に没した。大分市萬寿寺境内に墓があったという。」

このように安倍宗任の伝承は九州地方にかなり残っています。そこでもう一度私の方で和田家文書を再調査しました。すると面白い事実が出てきました。

『宗任状』（宗任が貞任の次男高星丸に送った手紙）によりますと、

「陸奥を去して候間久しく候へども、われ汝を見給ふは、乳児面候他覚へ候はず。筑紫の国に汝を父母何方相似て候ぞ海月に眺居候。東日流の候は、余未踏にて覚へ候はず、汝が成身の相、幾程にも想い廻らし居候。恨めしく候へども厨川の事の候を忘れまず父様孫父様な菩提を頼置き候。

世は倭朝も未だ非ず武家にて握る世の候ぞ近く覚へ候。依て、一族密に海に通じ候へば、未に道々の明らけく覚へ候。丑寅日本国は不死鳥に候へば、余は汝を興し事に夢懸居候。一族無敵の計は海に候事ぞ。以後の要と奉るべし。六人船大工を遣したる程に、能く習候へて、余老逝ならざるに船造り候へて、大島に汝相を見さしめ給へとこそ、急筆の本報を仕り候。

卒爾乍ら老婆心一状以て如件。

天永辛卯（二）年（一一一一）二月十日　八十三歳翁　三郎宗任

藤崎大夫高星殿」

これからは海に出て活躍する時代だ、船大工を遣わしたから造船を習って船を造り、自分の所へ会いに来て顔を見せてほしい、という手紙です。

高星丸は船大工を迎えて安東船を造り、安東水軍を作り、宗任に会いにいったと『安東水軍起抄』という文書に書いてあります。

「永久甲午（二）年（一一一四）夏七月三日、陸奥国下磯東日流廣田湊川中州に安東船を造りける。

飯積山より大材を伐し木挽きて幅三間半、縦十二間、三柱帆張り筑紫型なる大船成れり、是れ天永二年、大島より宗任が遣したる船大工の手に成れる大船なり。同年四月、雪解の大水に岩木川に水入れたれば、その雄姿に見つるる者涙悦せり。安東船初なる誕生なり。この地ぞ、今なる五所邑湊なり。

此の船、八月七日西海沿を筑紫国大島に至るるも、宗任既に他界し、高星その菩前に涙せり。依て、船名付を季任（宗任の末子）に頼みて、是を日之本丸と号けり。

寛文二年（一六六二）五月二日

緒方光弘」

これは緒方光弘という人の書いた文書を、秋田孝季は九州まで来た時に写したものだと思います。『宗任状』は天永辛卯年（一一一一）、『安東水軍起抄』が永久甲午（二）年（一一一四）でして、その年に大島に来た。しかしその時には宗任は死んでいた。その墓の前で高星丸は泣いた。そういう記事です。今まで謎とされていた宗任の没年がこれから推測できます。この足掛け四年の間、しかも高星丸が行って初めて知ったようなので、一一一四年八月七日に近い方であったということがわかるのです。つまり九州側の伝承、『安倍宗任と緒方惟栄』にいう「永久二年三月十五日」と見事に一致するのです。これらは九州と津軽で、全く別個に独立して成立した文書で、それが一致することは、歴史事実を示していると考えられます。このことは偽作の疑いを全く否定するもので、というのも

『安倍宗任と緒方惟栄』という本は大変な希覯本で、私も八方探した揚げ句、大分大学と岩手大学の図書館にあるのを見つけた、という有様で、簡単に見られるものではありません。

なお、宗任の終焉の地が豊後であることに関しては、『宗任大聞』に、

「安倍鳥海弥三郎宗任の一生は、筑紫国東に居を長じたり。彼の巡脚記に曰く。

筑土日向地は祖恨の敵、佐怒王がいでし国なり。我れ国敗れて此の地に至る。国東より望む高千穂に何事の神やあらんと曰へり。」と、一言だけ触れられています。

『宗任状』の古さについては、その冒頭に「われ汝を見給ふは」とあります。これに古田先生が目を付けられて、「これは平安・鎌倉に特有の《謙譲の給う》であって、『嘆異抄』蓮如本にもあった、この時代特有の用法である。」と看破されました。（『親鸞思想』・『親鸞・人と思想』参照）宗任の十二世紀はこの用法の生きていた時代であった。現代人が偽作しようとすれば、よほど時代別の特殊な用語に通じていなければ、このように的確に使うことはできません。

平安時代の宗任の言葉遣いをそのまま伝えている点、素晴らしい伝承力だといえるでしょう。

金光上人と九州

和田家文書が、比較的まとまって世に紹介されたのが昭和三十五（一九六〇）年、『金光上人の研究』という本を、佐藤堅瑞さんという方が出されました。金光上人は浄土宗の法然上人の弟子で、当時聖光と一二

を争うほどの高弟だった。法然は金光に東北布教を、聖光には筑紫布教を命じて、聖光は功成って法然の跡を継ぐのですが、金光は酷寒の津軽で亡くなってしまう、しかし結果として津軽は浄土宗が盛んなのです。佐藤堅瑞さんは「我々がこの土地で生活できるのは金光上人のおかげだ。しかしその事跡はほとんど知られていない。私も十何年調べ回ったが解らなかった。ところが昭和三十一年に和田家文書を見て、初めて金光上人の動向が解って、昭和三十五年に本として発表した」と語っています。その方の先輩にあたる開米智鎧さんが和田家文書をその前にご覧になって、金光上人や役小角のことが書かれているのを見て、佐藤堅瑞さんを呼んで「凄いものが出てきた」と教えられた。だからその以前から開米智鎧師は読んでいたようで、昭和三十九年には『金光上人』を著されました。

金光上人は福岡県浮羽郡の生れで、その点私と同じなのです。出身のお寺が石垣山観音寺、天台宗です。この正月に帰省して、行って参りました。住職が菊川春暁さんといい、いい感じの方でした。宗派も違い、遠い津軽の伝承などご存じなかろうと思って行きましたが、案に相違して、『金光上人の研究』も『金光上人』もお持ちでしたし、和田家文書についても、そして青森の藤本光幸氏のことも知っておられました。

ご住職の話では寺を訪れる人は、天台宗関係の人よりも浄土宗関係の人の方が多いのだそうで、そのため案内板やパンフレットの印刷までされていまして、和田家文書を大いに参考にされていました。いっぽう、こちらには金光上人の若い頃の伝承が残されています。

また、開米智鎧さんの『金光上人』の略年表に、「応保元年（一一六一）七才、高良山精覚に八宗論を学ぶ」とあります。筑後一宮の有名な神社・高良山に三井寺があり、ここの精覚に八宗論を学んだのです。その後に「嘉応元年（一一六九）十五才、江州三井寺精覚に台教を学ぶ」とありますが、これは高良山の三井寺を誤伝したものと思われます。これを調べるのも今回の目的だったのですが、やはり出て来ました。『太宰管内志』筑後之三、御井郡上に三井寺の項があり、座主の系譜の中に「精覚律師」とあります。記された在職年次と略年表の一一六〇～六九が一致していまして、この精覚律師に師事したことは間違いありません。このことを住職の菊川さんに話しましたらびっくりされまして、「長年調べていたが解らなかった」と喜ばれました。このように津軽の和田家文書の伝承と、九州の『太宰管内志』の記述がきっちり合うのです。

カメは洋犬か

「季刊邪馬台国」で挙げている偽作論の中に、『外三郡誌』に「古代東日流弁」の記事が載せてあり、その中に「カメ――犬」という項目がある。斎藤隆一さんがそこに噛付いて、「カメというのは幕末の開国以降入ってきた外来語で、江戸時代に犬のことをカメなどと言ったはずがない、後代偽作の最たる証拠である」というのが論拠でした。確かに外来語辞典にはそう書いてあります。角川書店『外来語辞典』、古くは『言海』明治二二年にも、『明治事物起源』明治四一年にも同趣旨のことが書いてあって、「外人が犬を呼ぶのにcome here と言ったのが誤伝して犬の事をカメと言うようになった」とし、その出典としては『横浜奇談』を挙げています。そしてほとんどの国語辞典類にはこの説が書かれています。ところが小学館の『日本方言大辞典』には、語源として同趣旨の事を載せながら、犬をカメと呼ぶ地域の分布として青森県・山形県・福島県・富山市・山梨県・愛知県などを挙げています。これは明らかにおかしい。外人の呼び方から来たものなら、神奈川・東京を中心に分布していなければならないのに、ことさらに遠い地方に分布しているのはなぜか？　そこで改めて『横浜奇談』を探して読んで見ました。「異国の犬をカメカメといふ事と心得、其犬を見てカメカメと呼ぶ者あれども、左には非ず、彼方にて、都て目下の者を呼招くの言葉にして、犬の惣名には非ず」

これで解ったのですが、『横浜奇談』の文章は二つに分れています。前半は「犬の事をカメカメと呼ぶものがいる」ということ。これは見聞した事実でしょう。後半は「これは

英語のcome hereを誤解したに違いない」という推測です。前と後は厳密にわけて考証しなければならない性質のものなのに、ごっちゃにして雷同しているのです。正に「一犬虚に吠えて万犬実と伝ふ」それが明治の大槻文彦（『大言海』の著者）ほどの大学者すら、判別できていないのです。病根は深いと言わねばなりません。

しかしそれらの資料の中に、カメがより古い言葉である兆候は見えています。『明治事物起源』に引く『繁昌誌』に「獒をカメと訓ず」と言い、『日本方言大辞典』に狼をカメという例、オーカメという例を挙げ、その多くはやはり豊富に江戸時代資料から取られています。本来犬のいない所に連れてきたなら、急激な流行が起こることもありましょうが、犬と言い換えれば済む所で、一誤用から出た言葉が東北の隅々まで使用される事は考えられません。

結論すると、カメ外来語説は学問の方法上成立しない。方言の分布は外来語説では説明できない。類語のオオカメが狼の事であるのは文献上江戸時代以前まで溯り得る。以上から和田家文書に犬を古代津軽弁でカメと書いてあっても、偽作の証拠にはならない。このような骨子で東北地方の郷土史に論文発表しようと思っています。そうすれば、現在発見していない、犬を直接カメと呼ぶ用例が出てくるのではないかと、楽しみにしています。

（まとめ・安藤哲朗）

中小路駿逸氏講演会　延期のお知らせ

毎年夏に中小路駿逸氏のご講演をいただいていますが、今期はご健康の都合から延期せざるを得ないとのご連絡をいただきました。

会員の皆様のご諒承をお願いいたします。

なお、ご自分の体調と、ご近況につき、自ら詳細に書かれたものをいただきましたので、あわせて掲載いたします。

事務局

近況お知らせ・・・中小路駿逸

昨年秋から肺に何かできていて、ことしになってから数がふえていることがわかっており、ただ、ガンなのかどうかという点が、いろいろ検査してもわからないので、摘出して調べようということで、去る四月八日に宝塚市立病院に入院して手術し、ガンではないことが明らかになり、（「科学的」とか「実証的」とかいうのは、こういうことなのですかね）同月二九日に退院しました。容体は薄紙をはがすように、次第によくなりつつあるものの、傷あとの癒着やらヒキツリやらのせいで、凝りだの呼吸困難だのがつづいており、その上に、四年前の胃の手術やら、年齢（六七歳）やらのせいもあって、急には回復しないようです。体が動きにくかったり、すぐに疲れたり、息が切れたりする状態が、当分つづくと思われます。（人にもよるが手術後半年ぐらいと医者からは聞いています）。そういうわけなので用心して、来たる七月十九日（土）に予定されていました多元的古代研究会・関東主催の講演は延期にしたい旨、高田さんに申し入れました。

ちょうど一九九〇（平成二）年以来の大阪梅田での『古事記』・『日本書紀』を読む会と、一九九四（平成六）年以来の神戸三宮での、『万葉集』を読む会が、どちらも手術直前の本年三月でひとまず終了して、ここで一休みしていろんな整理をやろうか、と思っていたところでした。当然、私はこれを神からの恵みのこもった計らいと信じて、十分に休養させていただくつもりでいます。

最近、古田氏のまわりに、かつての仲間うちでの「縁切り」・「愛想尽かし」があれこれと起こっていて、それはある時期に起こらなければならない現象なのだと思っています（そもそも私は、ひとりひとりが旗印をハッキリあげて、ひとりひとりバラバラになるがよろしい、とまで言っていた人間なのですよ）が、この講演会の延期は前記の理由によるもので、ここにいう「離合集散現象」とは関係ありません。念のため申し上げておきます。またお目にかかれるときを楽しみにしております。

一九九七（平成九）・五・一九

たろんサロン

多論 些論

会員のページ
筆者はいずれも本会会員

師木県主波延は女性

小金井市　斎藤　里喜代

多元十八号掲載の平田博義氏「磯城県主について」の中で、私の「続・皇后が三人ずつ」に疑義ありとして、『安寧記に「河俣毘売之兄、県主波延之女阿久斗比売」とあります。波延（葉江）は男だと明記されています。「男弟」の解釈も必要でしょうが、この「兄」は明確です』と書かれていますが、はたしてそうでしょうか。

と言いますのは、同じ安寧記に「此王有二女、兄名蠅伊呂泥。亦名意富夜麻登久邇阿禮比賣命。弟名蠅伊呂杼也」とあり、兄と弟はあきらかに女性に使われています。兄比賣、弟比賣の例もあり、「兄」と「弟」は男女共用です。

今回安寧記を含む「古事記中巻」の全部の「兄」「弟」「姉」「妹」を調べたところ、「兄」は53個出てきて、そのうち

男と断定できるもの　41個　77％
女と断定できるもの　5個　10％
何方とも言えないもの7個　13％
（師木県主波延を含む）

「弟」は同じく53個出てきて、そのうち

男と断定できるもの　19個　36％
女と断定できるもの　25個　47％
何方とも言えないもの7個　13％
地名　2個　4％

となって「弟」の場合は女が上まわっています。男・女の判定は「ヒコ・ヒメ」「男・女」「郎子・郎女」「娶」「生御子」等でしました。

「兄」「弟」は男女共用です。

ついで「妹」は17個で一〇〇％女性です。そして対になる上の兄弟は、男と断定できるもの14個、不明なもの3個です。

そして「姉」という字は「古事記中巻」の内では一個も出てきません。また「欽明紀」の「小姉君」が「欽明記」では「小兄比売」となっているのが印象的です。上巻には三個の「姉」がありますが、すべて石長比売です。対になる木花之佐久夜毘売は「妹」ではなく「弟」の字が使われています。

また「兄弟姉妹」を「古事記」で検索していて気付いたのですが、「古事記」の「兄弟」は、「上女下女」と「上男下男」で、「上男下女」は、「兄妹」か「男性名プラス妹」です。そうなると「上女下男」の「きょうだい」は「兄（あね）と男弟」か「姉と男弟」としかならないように思えますが、どうでしょう。

「兄」でも「姉」でも「懿徳紀」の第一の「一書云」（一云）に「磯城県主葉江の男弟猪手」とある以上、自然の解釈として、磯城県主葉江は女性です。この場合「一書」という別の書物なので「日本書紀本文」を検索するのは無意味です。　また、県主葉江の年齢ですが、

平田説の二百五十七年の根拠は、『日本書紀』にある、

安寧天皇　三十八年在位
懿徳天皇　三十四年在位
孝昭天皇　八十三年在位
孝安天皇　百二年在位　　合計二百五十七年です。そして、百二年の「孝安在位年間（葉江が）生きていないとしても、安寧に嫁ぐ迄の親の年数があります」と言い、孝安の在位百二年と親の年齢約三十年を相殺させていますが、変だと思います。現在、女性の結婚が十五歳から許されている事を思うと、二倍年暦で三十歳をプラスすればよいことです。

そこで、二百五十七年マイナス百二年プラス三十としますと百八十五年、現在の暦で九十二・五歳。なんとか収まる年数です。

しかし孝安即位の時、葉江九十二歳では、皇后は腹をいためた女（むすめ）ではなく、養女で次期磯城県主候補ということではないでしょうか。他のむすめも養女がほとんどで次期磯城の県主候補です。卑弥呼と壱与の関係も参考となるでしょう。

また、平田氏の指摘で「祖」について調べたところ「古事記中巻下巻」では「祖」「御祖」のみでした。私の勘違いで口がすべったもので「始祖」も「遠祖」もありませんでした。「続・皇后が三人ずつ」では「祖」を「古事記」中のみ問題としていて「日本書紀」を問題としておりません。

「古事記中巻下巻」で「御祖」は本文6個割注1個計7個すべて女性であり、直接の女親つまり母親です。

そして、女で「祖」になっているもの5個。師木県主の祖河俣毘売（綏靖記）、師木県主の祖賦登麻和訶比売（懿徳記）、尾張連の祖意富阿麻比売（崇神記）、尾張国造の祖美夜受比売（景行記）、三尾君等の祖若比売（継体記）の5人です。

これは「師木県主の祖先が河俣毘売や賦登麻和訶比売です」と言い換えると、師木県主が女系だとわかり

ます。尾張も連の祖は女系、国造の祖も女系。美夜受比売が国造だったのでヤマトタケルに付いて歩かないとの解釈もできます。師木県主の祖は、女名にしなくとも、父兄弟として男名で装飾して書けるのです。それをしないという事は、河俣毘売も賦登麻和訶比売も、師木県主だったということです。

女の祖が「御祖」に近い「ただの親」と遠慮した「続・皇后が三人ずつ」では弱いくらいです。「日本書紀の立場からは磯城県主の『祖』は弟磯城以外は考えられません」という考え方は、日本書紀の一元主義に取り込まれているように思います。

以上、師木県主波延を長生きの女性権力者とする説は充分成立すると思います。また、別人ですが、継体記には波延比売もいます。

また、平田氏の作った系図について少し異議がありますので、私も系図を作成しました。

これをみれば、磯城県主大目は十市県主の祖先で、傍流だと一目でわかると思います。

古事記・師木県主の系譜（A～E同一人物有り）

- A 師木県主波延――阿久斗比売
  - B 河俣毘売（カワマタヒメ）……師木県主
    - 賦登麻和訶比売（亦名 C 飯日比売）
      - ……十市県主
      - D 大目――E 細比売（師木県主）

日本書紀本文・系譜

磯城県主 D 大目――E 細媛

日本書紀第一の一書・系譜

- 磯城県主
  - A 磯城県主葉江――川津媛
    - 渟名城津媛
    - B 川派媛（カワマタヒメ）
      - 長媛
      - 男弟猪手――泉媛

日本書紀第二の一書・系譜

磯城県主太真稚彦――C 飯日媛

D 大目等――真舌媛……十市県主五十坂彦

……十市県主

家紋

熊本市　平野　雅曠

天草四郎の軍師、森宗意軒の後裔と伝えられる天草大矢野島出身の、故、森慈秀氏は、昭和の初期、県会議員当時、『和服に紋付があるのだから、礼服のモーニングにだって、紋付があって当然だ』と、モーニングの背中に家紋「剣花菱」を附けて議場に臨み、当時大きな話題になったものである。

また氏は、天草の経済、文化発展の為、島と熊本本土を結ぶ橋を架けよと提唱し、遂に「天草五橋」を完成させた功労者でもある。

私は秘かに、氏の家紋を尊ばれる姿勢に感銘したものだった。

家紋を大切にすることは、先祖を尊ぶ心に通じるものであるが、戦後、欧米文化の流入によって生活様式も一変し、特に男子は和服着用の機会は殆ど無く、貸衣裳の紋付で結婚式を挙げた息子達は、自家の紋すら良く知らないようである。世間一般も御同様ではあるまいか。

私にしても、戦後礼装はモーニングで通して来たし、紋付袴は箪笥の中にしまい込んだまま、着たことが無い。でも、家紋の「鬼花菱」は先祖の片身だと忘れぬように、新設の寄せ墓には、幾つも刻ませておいた。

さて、先頃NHKテレビ「毛利元就」の中で周防の豪族大内氏の家紋といって、「大内菱」なるものが放映されたのを見て、『ハッ』とした。「鬼花菱」らしいものが見えたからである。瞬間だったのではっきりはしなかったのだが、何か縁故でもあるのでは、と気になった。

かねて古代史の研究で、百済の聖明王の第三子琳聖太子が、推古天皇一九年（六一一）、倭国に渡来して、聖徳太子から周防の大内県を貰って住みつき、大内氏の祖となり、妙見信仰にも力を尽くしたことを承知している。

また、聖明王は、倭国に仏像を齎らしたことで史書にも記され、その父は倭の武王と親交あった寧東大将軍武寧王（斯麻）である。

私はふと、聖明王を祀っているという、京都の古社平野神社に、社紋を照会してみようと思い立った。大内菱と関連するような何かのヒントが得られるかもしれぬと考えたからである。住所もはっきりせぬまま、京都市だけで送ったところ、数日して返事が来た。封筒の裏に印刷された住所は、「京都市北区平野宮本町一番地」とあった。成程、お宮が町

名になっているなら着くのも当然だ、と感心した。

だが、当の社紋は、予想していた「菱」ではなく「桜」だった。平安時代、花山天皇が桜をお手植になって以来、桜の名所として知られ、社紋は鎌倉時代に「桐ケ谷」という桜を取り入れたもので、それ以前のことはわからないとのことであった。

そして、大内氏も毛利家も御祭神から出ており、貴家の家紋が「鬼花菱」でしたら、当社に御神縁あるものと信じます、というのが神社からの返事のあらましであった。

数日後、私は、以前に買った『家紋大図鑑』という本があったのを思い出した。いつか家紋を調べたことがあったのを忘れていたのだ。花菱の先端の尖っている『鬼花菱』を、別名「剣花菱」とも言うとばかり思い込んでいたが、『図鑑』を再見して全く別な紋だということもわかった。

また、「大内菱」も載っていた。これは「鬼花菱」を中心にして、外側を四角に枠型で囲んだ、ちょっと複雑な紋であった。NHKテレビでは、外側の枠に気が付かなかったのである。しかし、「鬼花菱」の部分が共通であるのは、やはり何かの繋がりが考えられる。そこで菱紋についての説明文のところを読んでみたら、「周防の大内一門である宇田、右田、陶、吉敷、平野、間田、鷲頭、鰐石、黒川、江木、末武、野田、冷泉、山口、来原、諸氏も大内菱を用いる。」との附記があり、一門として平野姓があったのには、些かの驚きと喜びに似たものを感じた。恐らく我家の先祖は、複雑な「大内菱」そのものを避けて、「鬼花菱」だけの単純明快さを採ったものであろうと思った。

戦国時代の頃戦乱を避けて、肥後熊本の田迎（たむかえ）の里に移り住み、ささやかながら地主の端くれとなって居付いたものであろうか。

だが、先の大戦後の地主達は憐れで、それも平野家傍系の私は、鳴かず飛ばずの月給鳥で定年を終え、今や尾羽打ち枯らした年金鳥に姿を変えて久しい。

しかし、考えてみると、周防の豪族大内氏の一門だとしても、血の色も薄い傍系の、又傍系の一人だろうとは思うが、か細いながらも血脈は、古代の百済王正家に繋がっていることになる。

来るべき米寿の年には（元気で生きていたらのことだが）六十数年ぶりの「鬼花菱」の紋付羽織に袴を着けて、「お詣り」用の記念写真でも撮っておこうか、と思案中である。

呵々。

（平成九年三月稿）

定例活動の報告

富永長三

常陸の国風土記の丘散歩

五月三日（日）、常磐線快速で出発、石岡下車、この辺は国府の所在地として有名で、古代観光地の趣がある。バスで常陸の国風土記の丘へ。

◆展示室で巴形銅器を見る。（宮平遺跡出土。関東では珍しい。立体的に鋳造されたもので、弥生の大和の物よりは上質である。）

構内に移設復元された鹿ノ子遺跡の建物を見学。常磐自動車道の建設の際発見されたもので、漆紙文書の出土で有名である。

◆常陸国分寺跡

中門・金堂・講堂の礎石を見る。これとは位置がずれて版築の基壇がある。

◆舟山塚古墳

全長一八六メートル、東国第二位の大きさ。現状で三十六基の古墳群。頂上に石碑があり、周囲に賠塚二三あり、俗に入船・出船という。

◆高浜神社

常陸風土記に見える、高浜の津にある神社。いまは寂れていても、ある時期、衆任の船路の安泰を祈った日もあったのであろう。明日の講演会のこともあり、早めに引き上げる。

山田宗睦 日本書紀講座

第二十三、二十四、二十五回

神代上を終え、神代下に入る

第八段の第五の一書、第六の一書を読むと、神代上は終わる。一字一句もおろそかにしないという方針で臨んできたが、二十四回かかって巻一を終えたことになる。山田先生は読み終えるまで生きておれるかどうか、としみじみ話された。以下は講義の要旨である。

第五の一書はスサノヲと韓半島との関係、韓への認識（韓は金銀に恵まれた富んだ国）がうかがえる。スサノヲの根の国（母のいるところ、本籍地）は海の彼方、韓半島ではなかったかと思わせる。舟と樹木の関係も興味深いが、ここに漢字で書かれた樹木が現在の何の木であるのか、テキストの読みや注には疑問の余地がある。木種が紀伊国に渡ることになっているように、この一書は紀氏が伝えていた気配がある。

第六の一書は巻二のストーリーの伏線、内容を先取りする形になっている。大国主神が少彦名命と国作りをする話、それに大三輪の神が絡む話である。日本国、大三輪といった表現は天武の頃でなければ、出てくるはずがないので、この一書は新しいものであり、実質的には天武の時代のことを書いているとみてよい。少彦名命は海の彼方からやってきた小童、小男となっているが、なぜか海の向こうからくる神は小さいとされている。宿題にして考えてみたい。

さて、巻一の全体像であるが、書紀の成立ちを考えてみると、先行する倭国史（と仮に呼ぶ）、筑紫固有神話があり、それらを利用して書紀は作られたと考えられる。その場合、物語の順序とそれが作られた順序は違うということ、古事記を前提にして、書紀を考えてはならないということである。何度か話したように、古事記よりも書紀のほうが古い、古事記は書紀の一部の資料を元にして書かれている、したがって記よりも紀の方を重視しなければならない。

神代上の八つの段は以前から章名がつけられている。第一～第三段までは神代七代章、第四段は大八洲生成章、第五段は四神出生章、第六段は瑞珠盟約章、第七段は宝鏡開始章、第八段は宝剣出現章、というわけである。神代七代章はさらに二つの章に分けた方がよいと思うが、この各々について倭国史、筑紫固有神話との係わりを考えていく。この話は倭国史にあったか、筑紫固有神話と考えられるかと問うていく。

神代七代章は中国の古典から採ったことは明らかだが、しかも「准南子」などの原典ではなく、「芸文類聚」という唐の時代に作られた各種の抜粋集から採ったことを小島憲之氏が突き止めた。すでに倭国史の段階で神代七代が作られていたかどうか、古田氏は肯定されるが、そう言い切れるかについては留保したい。

このようにみていくと、大八洲生成章のイザナミ、イザナキの話は筑紫固有神話であるが、国生みの話はそうでないことがみえてくる。また、四神出生章では、倭国史ではヒルコ、ヒルメ、ツクヨミであったが、書紀ではヒルコに変わってスサノヲが入り、ヒルメはアマテラスとなった。瑞珠盟約章、宝剣開始章は、天空神話、冬至神話がコアにある。倭国史にはなく、大和王権が中国から取入れたものと考えられる。つまり、高天原神話は大和に固有の話である。宝剣出現章は鉄とドラゴンの神話で、中国から倭国に入り、大和王権も取入れた。

神代下の始まりは第九段である。いきなりアマテラス、タカミムスヒが登場する。しかもアマテラスの息子アマノオシホミミとタカミムスヒの娘タクハタチヂヒメの間にニニギノミコトという本段の主人公が生まれたことになっている。この辺は余りにも問題が多い。系図が巻一とは違っており、書き手も違うのではないかと思われる。

（木村由紀雄・記）

講演会「島根県の考古学」

島根県埋蔵文化財センター　センター長・宍道正年氏による

ゴールデンウイーク最中の五月四日、『出雲の旅』で一行を歓迎して解説を買って出てくださった宍道正年氏（島根県埋蔵文化財センター長）が、東京・池袋での『島根県考古学展』参加の合間、出土物の解説と出雲の考古学的特徴を主題として講演された。

大荷物と貴重品

宍道氏は大きな箱に講義用のOHPフィルムやレジュメや、実験用の材料を宅配便で持ち込まれたが、その他に模造の銅鐸をショルダーバッグに包んで持参された。

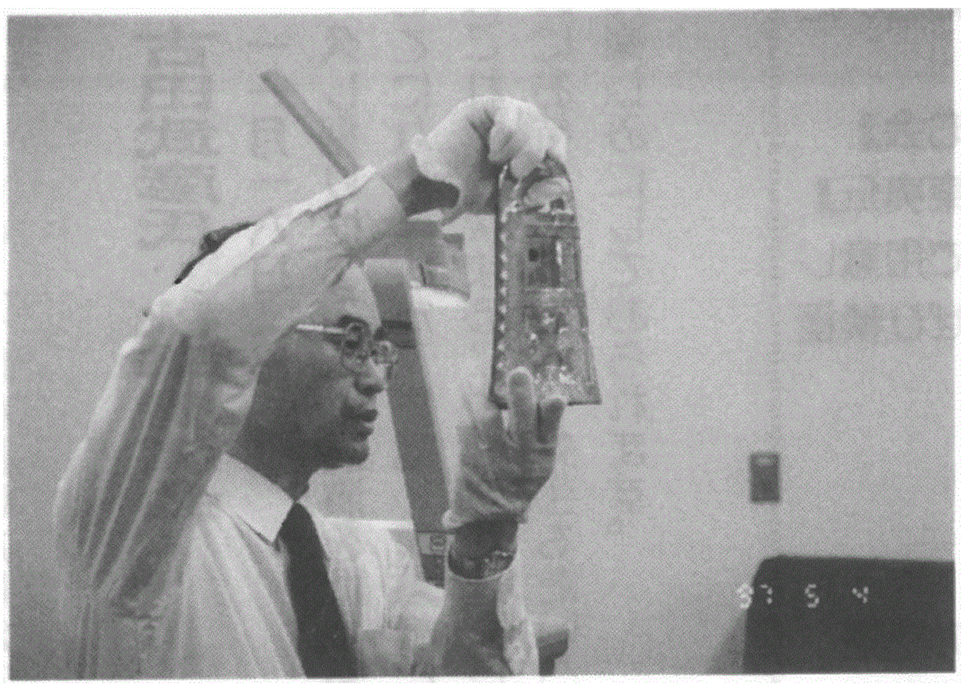
この銅鐸は、模造とはいえ、本物の形を正確に模し、金属の組成もよく合わせてあるもので、簡単に作られたものではないので、移動には必ず職員が自身で運ばねばならないそうだ。かなり重量があり、たいへんだという。

OHPによる懇切な説明

場所は文京区の女性センター。収容人員一杯の聴衆に、初夏の会場はあふれた。

宍道氏はOHPを使って、島根県の考古学的位置や縄文以来の出土物の経過を話し、とくに隠岐の島の黒曜石と、他の地域産出の特徴を、実物を回覧してくわしく話された。

問題の銅鐸と出土状況は、工事の途中、パワーショベルによって発見されたという事情もあって、埋納状態が明白でない部分もある。それでも幸いなことに、試掘で存在が予測されていたため、ほとんどが無傷で掘り出された。埋納の仕方は、意外と狭い容積に密集して埋められていたので、ほとんど重ね上げて土を被せたような形で見付かったということであった。また入れ子（大きい銅鐸に小さい銅鐸を入れて埋めたもの）で出土したものの一部に、土が入ってないものが発見され、埋められてから土が流れ込んだことが判明したという。また種々の文様がみられるのも今回の特徴で、亀や顔と思われるものの文様は珍しい。



黒曜石と鶏肉

黒曜石のX線スペクトル分析による産地特定について。黒曜石の中に含まれる微量物質を検出することによって、現在は隠岐の島の中でも幾つかの産地に別けて鑑定することができる。現在は国内はもちろん、（古田氏が国引神話から予言したように）シベリア方面にも輸出されていたことが解っている。

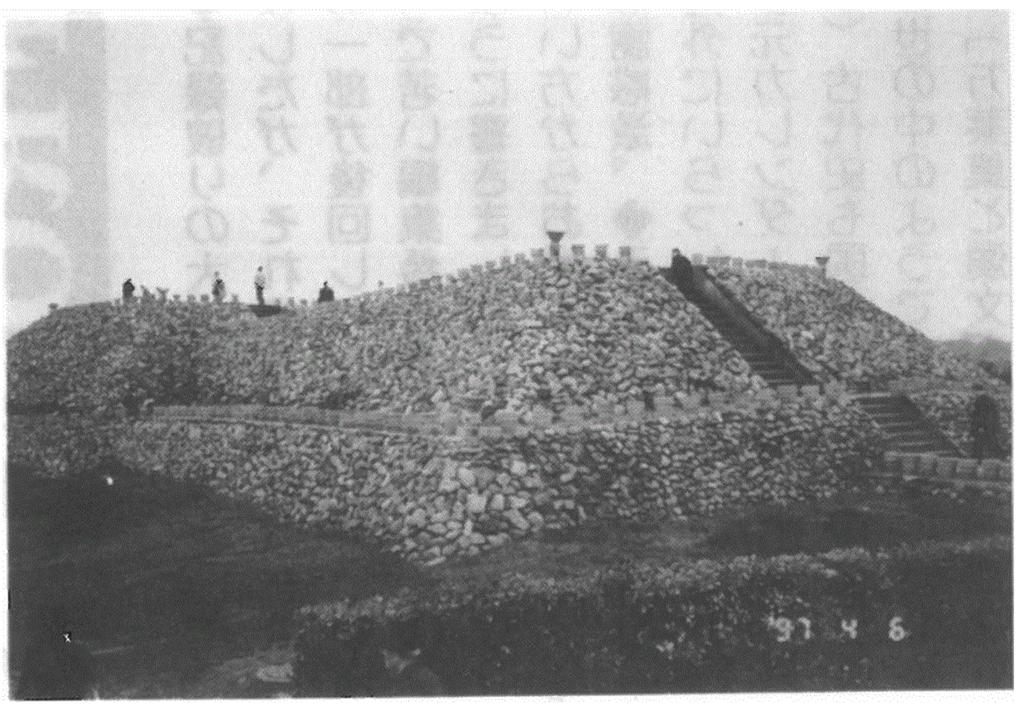
生産地別の黒曜石が回覧された。手に取ってみると改めてそれらの大きな違いも分かるようだ。また持ってみて意外に軽いのに驚かされる一幕もあった。

黒曜石の細石刃を使っての鶏肉を切る実験が行われ、ことに女性の興味を引いた。切れ味も、脂肪で切れ味が劣化する程度も、鋼のナイフよりもすぐれていて、適当な柄をつければ料理に使えると評判。

最後に氏は模造の中形銅鐸を取り出し、舌を付けて鳴らして見せた。鏘々玲々たる響きは部屋一杯に広がり、受講者を魅了した。

古代出雲文化展

池袋・東武美術館にて、六月八日まで開催。三五八品の銅矛と今回発見された加茂岩倉の銅鐸の全数が展示されている。なお七月には島根展、一一月には大阪展がそれぞれ開催される。



事務局便り

平成九年度定期大会

六月一日（日）午後一時半より、議題は①平成八年度活動報告、②同年度会計報告、③平成九年度活動計画、④同年度予算、⑤役員改選を予定しています。多数の会員の方の出席をお願いします。

「出雲古代史の旅」大盛況

四月五日から七日にかけて、古田武彦氏に同行していただいて実施しました。おかげさまで五二名の参加を頂き、大型バスも満員の盛況でした。日程的にもハードなスケジュールでしたが、全員元気に旅を終わりました。改めてご協力いただいた方々、現地で休日返上でお世話いただいた学芸員の方々に感謝いたします。

古田武彦氏　秋季講演会

一一月一六日（日）

久し振りにこの秋に講演を願えることになりました。詳細・演題などはこれから決まることですが、楽しみにお待ちください。先生もたいへん楽しみにしておられます。

『新・古代学』原稿募集のお知らせ

本年『新・古代学』第三集が発行されますが、論文・随筆・論考など、古代学関係の原稿を募集します。応募の方は安藤まで。長いものでも、四百字詰め原稿用紙十八枚以下。

新入会員募集

入会希望の方は、住所・氏名・電話番号明記の上、入会金一千円、会費四千円を添えて左記に申し込んでください。

「多元的古代研究会・関東」口座番号００１７０・９・７６８７７７

多元の会　カレンダー

記入のない催しの会場は全て文京区民センターです

6月

1日（日）午後1時半　「多元的古代」研究会・関東定期大会、　終了後（2時半より）発表と懇談の会として、『出雲古代史の旅』報告会があります

8日（日）午後1時半　山田宗睦氏『日本書紀講座』第２６回、（平成８年度最終回）この後７月・８月は休講となり、９月より平成９年度として継続いたします。

22日（日）午後1時　『万葉集と漢文を読む会』万葉集は巻１４「東歌」を、漢文は『隋書東夷伝』を読み進めています。テキストは、会の方で用意しますので、今まで見送って来られた方々もぜひ積極的に参加してください。

7月

6日（日）午後1時　発表と懇談の会　今月の話題提供者は、鴨下武之氏「中国の多元史・三星堆と古代蜀文化」〈陝西省・四川省の旅から〉
下山昌孝氏「考古学的に見る朝鮮半島と北九州の関係について

27日（日）午後1時　万葉集と漢文を読む会
山田宗睦氏『日本書紀講座』は休講

8月

3日（日）午後一時　発表と懇談の会
山田宗睦氏『日本書紀講座』は休講

24日（日）午後1時　万葉集と漢文を読む会

FROM 編集室

◆記録破りの大増頁になってしまいましたが、それでもいただいた原稿の一部が後回しになりました。◆先号で若い編集希望者を現れてくれるように書きましたら、早速何人かの若い方からお便りをいただきました。感謝感激。◆みなさんこの頃盛んに海外にいらっしゃるので、（試みに多元カレンダーの七月六日の項を見よ）古代史も国内だけでは収まらない世の中のようですね。◆という私も「万葉集と漢文を読む会」ではもっぱら東夷伝を担当させて貰っていますけれど、◆なかなか古代とは言え異民族の風習や習性などという、書いている中国人が解らないのですから不審のみ多いきょうこの頃です。◆会員諸氏の原稿をお待ちしています。必ずしも学術的なものに限定しません。ただし採否および掲載時期はお任せ願います。また送られる原稿は必ずコピーを取っておいてください。（紛失の予防と打ち合わせの便宜のため）◆編集者への連絡は下記へ・〒２３２横浜市南区永田みなみ台２・１０・４０１　安藤哲朗（☎０４５・７４２・１４４６、ファクスも）

（哲朗誠惶誠恐頓首頓首謹言）